

## 6 コミックスにおけるルイス・キャロル

- 2084 吾妻ひでお『ときめきアリス Hideo Collection 7』（双葉社, 1985年, Action Comics）

様々な「アリス」たちの日常あるいは非日常をテーマとする連作短編集。そのブックジャケットと表紙に描かれたアリスの姿（前者には夢見るアリス、後者には夢見ることを止めたアリス）は物語全体を象徴するものとなっている。特に後者の夢見ることを止めたアリスの姿には、「やけくそ天使」の一挿話「百回記念はティー・パーティー」（吾妻ひでお『やけくそ天使』5（秋田書店, 1980年, 秋田漫画文庫）p.57-62）の結末でアリスに扮した主人公がウサギ穴を駆け上がり、遂にゲンジツへ到達してしまう姿と共通するものが感じられるように思う。

- 2085 内田美奈子「ブームタウンのアリス」（内田美奈子『BOOM TOWN』1（竹書房, 1993年, Bamboo Comics, Gamma Series EX）p.45-74）

全感覚型独立オブジェクトのダムとディーとを連れてブームタウンをさまようアリス。彼女は、このブームタウンと呼ばれるネット型ソフトウェアの外部には実体を持たない疑似人格データ、すなわちコンピュータ・プログラムによって夢見られる夢の少女である。

- 2086 大島弓子「10月はふたつある」（大島弓子『ほうせんか・ばん 大島弓子選集4』（朝日ソノラマ, 1986年）p.291-331）

わたしは、不思議の国から帰って来たアリスのように、自問自答して考えます

p. 330

- 2087 大友克洋「不思議の国のアリス」（大友克洋『ヘンゼルとグレーテル』（CBS・ソニー出版, 1981年）p.55-59）

主人公であったはずのアリスは、ページからページへ移行するたびに、規則正しく増殖するフレームによって断片化されていく世界の中に閉じ込められてしまう。5ページ目においては、ほとんど意味を支えきれないまでに世界の断片化が進行する。もはや6ページ目で語り得る物語は残されていない。フレームは世界を成立させる重要な要素である、とする暗黙の了解は、フレームこそが世界そのものなのだという事実の前では意味を失わざるを得ない。そして、断片としての世界は新たな1ページ目として再び沈黙への移行を開始する。その過程で、物語構造ごと視覚化されたアリスは、5ページのフレーム内部に永遠に封印される。初出時（『ポップコーン』1巻1号, 1980年4月, p.24-28）のタイトルであった「5頁のアリス」そのままに。

- 2088 おおやちき「おかしな国のアリス」（おおやちき『おおやちき 絵独楽』（サンリオ, 1978年8月, 『月刊リリカ』3巻11号増刊号）p.60-52）

「不思議の」国ではなく「不思議な」国でもない「おかしな」国へ迷い込んだアリス。なぜ「おかし」なのか、と不審に思うアリスは、最終ページにおいて驚嘆すべき真実に直面するのであった。なお初出時（『リリカ』1巻1号通巻1号, 1976年11月, p.129-136）には、「ルイスキャンデー作 おおやちき絵」と付記されていた。